

Title	ガリレオ裁判 : 覚書
Author(s)	標, 宣男
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume21 : 149-173
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2743
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「ガリレオ裁判」覚書

標 宣 男

前書き

ガリレオ裁判は、宗教と科学の間に生じた軋轢としてあまりにも有名であり、これを理解するための様々な文献が存在する。身近に読める主なものを示すと、翻訳では、シヨルジュ・ド・サンティヤーナの『ガリレオ裁判』、アレクサンドル・コイレの『ガリレオ研究』、ステイルマン・ドレイクの『ガリレオの思考をたどる』、日本人によるものとしては、青木靖三『ガリレオ・ガリレイ』、田中一郎の『ガリレオ』、さらに渡辺正夫編著による論集『ガリレオの斜塔』がある。またガリレオの著作の翻訳とガリレオ論が併記されているものとして、豊田利幸編集の『ガリレオ』（この中にはガリレオの著書『レ・メカニケ』および『偽金鑑識官』が掲載）、および伊東俊太郎編著『ガリレオ』（ガリレオの著書『新科学論議』が掲載）があり、このほかガリレオの著書の翻訳としては、『星界報告』、『新科学対話』、『天文対話』などがあげられる。このうち、『ガリレオ裁判』と『ガリレオ研究』はもはや古典といってもよい位置にあるといえよう。また、伊東俊太郎の『ガリレオ』は日本におけるガリレオ研究の一つの水準を示

していると思われる著作である。更に、近年二つのガリレオ関係の翻訳が出された、一つは、二〇〇二年に出版されたデーヴァル・ソベルの『ガリレオの娘』であり、もう一つは二〇〇五年に出されたW・シア、M・アルディガスの『ローマのガリレオ』である。前者は、修道女となったガリレオの長女のガリレオ宛の手紙を中心に、父娘の心温まる交流と熱心なカトリック教徒であるガリレオの姿を伝えている。後者は、ローマにおけるガリレオの様々な活動を伝えたものである。

本書は、この新しく出版された二著を読んだことにより触発されたもので、聖学院大学において講じている、「キリスト教と自然科学」のための講義資料を改訂するための覚書という目的を持つものでもある。それゆえ、本論の性格上、なにか新しく付け加えるものがあるわけではないが、もし何か特徴的なものを強いて探すならば、ガリレオ裁判の背景を、なるべき広く捉えようと試みた点であろう。それらは、ガリレオとカトリック教会の論争の背後にある中世以来のカトリック神学を頂点とした学問の伝統、当時の政治状況、ガリレオ個人の問題などである。本論は、まず、ガリレオの生涯を辿ることから始めようと思う。

第一章 ガリレオの生涯…素描

(一) ピサからパドヴァへそして、フィレンツェ……数学者から哲学者へ

ガリレオ・ガリレイは、一五六四年二月一日、イタリア・ピサで音楽教師ヴィンツェンツィオの長男として生まれた。ガリレイ家はトスカナの没落した旧家である。また、ガリレイの生まれた年は、イタリア・ルネッサンスを代表する芸術家の一人であるミケランジェロの亡くなった年に当たる。ガリレイは一五八二年ピサ大学へ入学し

たが、学芸学部に席を置き教養課程を修めただけで、退学してしまった。以後大学に行かずに数学を学んだが、独学にもかかわらず、一五八九年ピサ大学数学教授となり、幾何学、天文学を教授するとともに、『タツソ考』など文芸批評まで行っている。後年、彼は優れた文章の多くの著作をなすが、その片鱗がこの文芸批評に現れている。一五九二年ピサ大学の俸給に不満を持っていたこともあり、ベネツツィア共和国のパドヴァ大学へ移った。そこでも数学教師として天文学、幾何学をおしえた。この天文学は、医学部の学生に向けおこなったものであるが、それは当時、医学を志すものは占星術の素養が必要であり、天文学はそのため不可欠な学問であったのである。これは、当時の大学における科学がどのような学問であったかが、伺われるエピソードである。これらの講義とともに、有名な落体の研究を行っている（公表は一六三八年の『新科学対話』）。また大学での講義の傍ら、私塾を開き、ラテン語、透視画法、幾何学、築城術などを教え、又幾何学的・軍事的コンパス（一種の関数尺）の作成と販売を行っている点は、彼が机上の学問ばかりの学者ではないことを示している。なお、彼はベネツツィア共和国のサロンにおいて、ベラルミーノ枢機卿とも知り合いになっている。かれは、後に教皇神学顧問として、ガリレオの太陽中心説への支持が問題となった時、重要な役割を不することになる。ガリレオは、正式な結婚はしなかったが、一六〇〇年、マリア・ガンバとの間に、後にガリレオへの手紙で有名になる長女（ヴィルジーニア・ガリレイ）が生まれた。一六〇四年新星が出現した。これがきっかけとなり、ガリレオは興味を中心を、力学から天文学へ移している。

この新星出現についてガリレオは、新星は月より上の存在と主張したが、これに対し、後に反ガリレオ同盟である「鳩科同盟」の中心者となり、アリストテレス哲学を信奉する、ヴィコ・デレ・コロンベが反論している。彼はこれ以後あらゆるガリレオの発見に対し批判を繰り返すことになる。ガリレオは、ここに天体の不変、神聖を主張する保守的アリストテレス主義の学者との戦いに参加した。なお、「コロンベ」はイタリア語で小鳩を意味し、「おろか」

をも意味したが、ガリレオの友人達はコロンベのことを「鳩」と呼んでいた。

ガリレオは、ピサ時代の同僚であったメデイチ家の侍医の推挙により、一六〇五年、領主トスカナ大公の長男、コジモ・ディ・メデイチの夏期の家庭教師になった。この時、前記の幾何学的・軍事的コンパスを献上している。そのコジモが、一六〇九年トスカナ大公コジモ二世となった。同年、ガリレオは、自作の望遠鏡で天体観測を開始し、月面の観察から天体の不変性を否定する思いを強くするとともに、木星の衛星発見し、それに「メデイチ星」と命名した。さらに同年、ガリレオは、コジモ二世の首席数学者兼哲学者（哲学者という称号はガリレオがコジモ二世に懇願して手に入れたもの）となり、友人（ベニティヤ貴族のサグレド）の忠告を振り切り、ベネツツィア共和国を去り、トスカナの宮廷へ移った。さらに、彼はピサ大学主任数学教授にも任命されている。サグレドの忠告とは、君主の気持ちしだいでも左右され、陰謀渦巻く宮廷生活のわずらわしさであった。トスカナの中心フィレンツェへ移ったガリレオは、一九一〇年、月面、銀河、星雲、恒星、また先の「メデイチ星」の観測結果などを記した『星界報告』を、コジモ二世に献呈している。この時点では、ガリレオの反対者は、カトリック教会ではなく、大学に代表されるアリストテレス哲学者達であった。その中心に鳩科同盟のコロンベがいる。彼らの中には、望遠鏡をのぞくことすらも拒否したものがいるほどであった。ガリレオが、木星の衛星を「メデイチ星」と命名したことは、メデイチ家の権威を味方にしたことになり、このような学者の反対に対する押さえとして機能したかもしれない。

(二) フィレンツェ・トスカナ大公宮廷そしてローマ

一六一一年ガリレオは、ローマへ赴いたが、そこで、イエズス会の最高研究機関であるコレージュ・ロマーノ（一五五一年創立、現教皇庁グレゴリオ大学）のイエズス会の数学者クリストフ・クラヴィスから、ガリレオの木星の

衛星発見を賞賛された。また同地では、枢機卿、高位聖職者の歓迎をうけ、特に、後に教皇ウルバヌス八世となる枢機卿マフエオ・バルベリーニと知り合いになった。彼もまた、ガリレオの業績を賞賛した。ガリレオは、大学の学者よりもむしろ、カトリックの学者の中に理解者を見出したのである。事実、『星界報告』が書かれて五年後の一六一五年、中国のイエズス会宣教師ディアズ（中国名、陽瑪諾）は、自著の『天文略』の中で、これを翻訳解説している。また、同年には、アダム・シャルル（中国名、湯若望）は、望遠鏡をその著書『望遠説』で詳しく説明した。さらに、このローマ訪問において重要なことは、ガリレオが、モンチイチエツリ公爵のフェデリコ・チエシの主催する、アカデミア・デイ・リンチエイの会員に選ばれたことであつた。これにより、彼はイタリアの有力者の庇護を受けることが出来るようになり、ガリレオの著名な著作の出版が実現されることになり、まず、一六一三年チエシ侯爵は、ガリレオの『太陽黒点に関する手紙』出版した。この著書によりかれは、太陽の自転、惑星の太陽周りの公転を主張し、天体の不変性、地球の不動性を批判した。この出版に際し、ガリレオは、前もつて枢機卿カール・コンティの意見を求めているが、彼の返答は、「聖書の記述は、天空は不変だとするアリストテレス学派の原則に賛成というよりむしろ反対です。しかし、地球が回転しているというピタゴラス学派の説については、事情が異なります」（二六二年七月）、といい、ガリレオの発見と天の可変性を支持した。しかし、この出版は、その解釈とともに黒点の発見に対する先取権論争を、ドイツのイエズス会士クリストファー・シャイナーとの間に引き起こした。前者についてシャイナーは小さい衛星であると誤った推論をし、後者についても、ガリレオのほうが早かったことがはっきりしている。

一方で、ガリレオに対する異端疑惑がおひざもとの、トスカナ宮廷で出された。それは、一六一三年、コジモ二世の母である、クリステイーナ大公妃の懇談会で、望遠鏡の観測が事実でも地球の運動は聖書に反するとの意見が

出された。後にガリレオの反論は『クリステイーナ大公妃への手紙』として出版される。そこには、バロニウス枢機卿の言葉を引用した有名な次の言葉が書かれている。

「聖霊の御意図は、人がどのように天にいくかを教えることでありまして、天はどのように運行するかではありません」。

しかし、さらにガリレオは『クリステイーナ大公妃への手紙』の中で、「ヨシユア記」の解釈という神学の問題に口を挟んでしまい、神学者の反感を買ってしまった。このような中で、一六一四年、太陽中心説に対し、「鳩科同盟」と繋がりのある若いドミニコ会士による名指しの非難がフィレンツェの教会の説教壇からもなされ、ガリレオへの公然の攻撃の発端となった。

このような動きに対し、ガリレオは、一六一六年の初頭、「潮の干満に関する論文」を異例の速さで書き上げ、地動説を証明しようとした（これは、後に『天文対話』の第四日目に掲載されているとなる。しかし、この証明は実は失敗であった）。しかしながら、一六一六年二月二三日、教皇パウルス五世は、コペルニクス説を禁ずる布告（最初の禁令）を出した。特に「太陽が世界の中心」と言う主張は聖書に反するとされた。しかし、「異端的」という言葉は付けられていない点は重要である。これは、枢機卿内でそれに反対するものがいたことを意味する（このことについては後述）。なお、この禁令はイタリヤ以外では実質上ほとんど影響がなかったが、二月二十六日、ローマ滞在中のガリレオ（この年五二歳）は異端審問所より呼び出された。これが第一次裁判といわれるものであるが、実際には、教皇神学顧問として神学的に教会を代表する、ベラルミーの枢機卿宅で、枢機卿より『自らの意見を真実として主張しないように』と戒告された。そして、ガリレオはその戒告に従ったといわれる。しかし、この裁判の記録は次のようになっていいる。

「二月二十六日、金曜、ベラルミー枢機卿殿下の当時の鑑定である宮殿で、償還されていた前述のガリレオが、前述のベラルミー枢機卿殿下の面前に出頭した。そして、異端審問宗教裁判所の予審主任で、ドミニコ会のロデイのミケランジェロ・セジツイ尊師立会いの下に、前述の枢機卿から、前述の意見の誤りを戒告され、それを放棄するように説諭された。その直後、本書記官と商人達の面前で枢機卿殿下も御臨席のまま、前述のガリレオは、前述の總主任から、法皇聖下と検邪聖省の全員の名において、太陽が世界の中心で、不動であり、地球が動くとの前述の意見を全く放棄し、今後は口頭と著述を問わず、どのような形でも、この説を信奉し、教え、あるいは弁護することが無いように、さもなければ、検邪聖省の手で、ガリレオを起訴する手続きがとられることになる」と命ぜられ、申し渡された。前述のガリレオは、この命令におとなく従い、服従することを約束した。本件はローマの前述の場所で前述の枢機卿の宮殿の使用人であるキプロス王国ニコシアの出身者 R・バディノ・ノレスとモンテプルチャーノ司教管内の居所から来たアゴステイノ・モンガルドの二人が、承認として立ち会って、行われた」。

これによると、ベラルミーノ枢機卿の戒告に加え、異端審問宗教裁判所の予審総主任で、ドミニコ会のロデイのミケランジェロ・セジツイ尊師による命令も下されたことになる。もつとも、ベラルミーノ枢機卿は自分の戒告で十分だと思ったようである。この議事録に署名がないのはそのためであるといわれる。それゆえ、この議事録には法的拘束力はないといわれ、そのまま書類の束の中におかれていた。これは、一九世紀には偽造ではないかと疑われたこともあったが、現在では本物であるとされている。この戒告と命令の後に、ガリレオは異端宣告を受けたと

いう風評が、イタリア中を飛び交っていた。これに対し、ガリレオはベラルミーノ枢機卿の次の文書を手に入れ対抗している。

「余ロベルト・ベラルミーノ枢機卿は、ガリレオ・ガリレイ氏が余の監督下で誤りを棄て、懺悔の苦行をかされたと中傷的に報じられていることを聞き、これについて真実を述べるように求められたので、ここに明言する。前記ガリレオは、余の監督下でも、又余の知る限り、ここローマの他の監督下でも、彼が支持する如何なる学説も放棄していない。又如何なる懺悔の苦行も彼にかされていない。ただ、教皇が作成し禁書目録聖省が公表した宣言が、彼に通告されただけである。それは、地球は太陽の周りを動くが、太陽は世界の中心で静止し、東から西に移動しないという、コペルニクスのもと考えられる学説は、聖書と対立しており、それゆえこれを弁護したり支持したりすることはできない、というものである。その証拠として、一六一六年五月二六日、余が自らの手で本証書を書き、署名するものである」。

この書類の内容は、明らかに先の議事録と内容的に矛盾するようなどころがある。ガリレオは、このベラルミーノ枢機卿の書類を当てにし、単なる道具としてコペルニクス説を用いることができると考えたようである。

(三) 再びフィレンツェからローマへ……ガリレオ裁判

一六一八年、三つの彗星が出現し、また三〇年戦争も始まった。これらのことは、それぞれガリレオの今後に影響することとなった。まず前者は、反ガリレオ派との論争の種になったこと、後者はプロテスタントとの戦争で

あつたため、カトリック教皇庁の保守色をいっそう強め、科学論争に対する理性的対応の余裕をなくする働きがあつたことである。さらにガリレオの今後にとつて都合の悪いことには、一六二一年ガリレオの庇護者であつたトスカナ大公コジモ二世が三〇歳という若さで死去し、その息があとを継ぎ、フェルディナンド二世となつた。しかし一〇歳と幼少であつたため、祖母の大公妃クリステイーナと母である皇女マリア・マッタレーダが摂政となつたが、当然これまでのような庇護が期待できなくなつた。さらに同年、ガリレオの業績に一定の理解を示した、ペラルミーノ枢機卿も死去した。

一六二一年という年は、これら二人が死去したばかりでなく、教皇パウルス五世も死去しており、同年新教皇グレゴリウス一五世が即位した。かれは、リレンチエイ学士院に所属している、ガリレオの二人の友人を、教皇庁の秘事を扱うような重要な位置である、各国との通信秘書および教皇の私室係りに昇進させた。この友人とは、各々三一歳のジヨバンニ・チアンポリと二八歳のヴィルジニオ・チェザリーニであつた。この教皇も一六二三年死去し、その結果、前出のガリレオの知人である枢機卿マフエオ・バルベリーニが教皇ウルバヌス八世となつた。このバルベリーニ枢機卿の教皇就任に対し、ガリレオは早速科学理論書『贗金鑑識官』を献呈した。これは、先の彗星出現に対しなされた、イエズス会の彗星議論を論駁したものである。これは文体上の最高傑作といわれ、その著作は科学者よりも詩人や作家の間で広く賞賛されたが、その批判の痛烈さからイエズス会を遠ざけてしまった。この中には、有名な、「自然は、幾何学の用語で書かれている」という一節が記されている。しかし、彼の彗星に対する解釈は、太陽光線が高度上空の水蒸気に反射して起る大気現象に過ぎず、それは天体の一つではない、というものであつた。なぜなら彼にとつて、天体の現象は完全な円運動であるべきであり、一方彗星の軌道は楕円であることは既に知られていたからである。

ところで、即位直後の教皇ウルバヌス八世の一六一六年布告に対する態度はどのようなものであったのであろうか。それを次にまとめてみる。

① 布告について、「これを指示したこともなく自分が教皇であったなら、日の目を見ることはなかったであろう」と誇らしげに述べていた。

② 一六一六の布告について、検邪聖省の顧問達が太陽中心説を「異端」としていたのに対し、枢機卿の頃の同僚の枢機卿ボニファツィオ・カエターニとともに、布告の最終文からこれを取り去った。

③ 太陽中心説は単なる誤りであって「聖書の記述に反する」とされてはいるが、異端ではない。

④ ウルバヌス八世の確信：「太陽中心説は単に証明されない考えに過ぎない。将来も立証される見こみは全くない。従つて、太陽中心説を用いたくば、仮説として用いるには何の問題もない」。

ガリレオは旧知が教皇となつたこの機を捉えて、一六三二年『天文対話』（『世界体系についての対話』）の出版を決意した。もし、チェシ公爵が生きていたならば、この『天文対話』の運命は違つていたかもしれない。しかし、ガリレオにとつて不運にも、実際には、チェシ公爵は前年に死去してしまつていた。この著書は、ガリレオの分身であるサルヴァルティ（ガリレオ知人の名前を借用）、聡明な理解力のある市民であるサグレド（パトヴァ時代からの友人の名前）、頑迷なアリストテレス主義者であるシンプリーチヨ（六世紀のギリシャ哲学者、アリストテレスの注釈者として知られるシンプリキウスから取つたと言うが、音がイタリア語の“センプリチヨット”間抜け、と似ている）の三人による、プトレマイオスとコペルニクスの二大体系についての話が、四日間にわたる対話形式で

展開する。

第一日 アリストテレスの宇宙論、運動論への体系的攻撃

第二、三日 地球の公転、自転を論じる

第四日 潮汐現象

本書は、太陽中心説の仮説性と、著者ガリレオ自らの中立性が保たれているように見られるが、明らかにコペルニクス体系を擁護している。『天文対話』は、教皇庁内の実力者ジョバンニ・チアンポリ（ガリレオの理解者）からニコロ・リツカルディ神父への圧力もあって、フィレンツェの検閲省を通過し、一六三二年二月出版が一度は許可された。しかし、その年の七月出版が禁止された。そして同年、九月、ガリレオはローマに来るよう命ぜられ、一六三三年四月異端審問所に出頭した。これがガリレオの宗教裁判である。この時ガリレオは六九歳になっていた。裁判は、一六三三年春一回のみ、「検邪聖省」における極秘裁判として行われた。この裁判においては、二人の当局者と、一人の書記官の前で証言し、陪審員である一〇人の枢機卿はこの証言の記録を後で読むという形で行われた。裁判結果は有罪の宣告であった。その理由は、一六一六年の戒告への違反である。

この裁判は、不可解なことが多い裁判であったといわれる。まず、何故ウルバヌス八世は、それまでの理解ある態度を変えたのか。ついで、検邪聖省が示したこの戒告には「言葉あるいは著作によって、太陽中心説を抱いたり、教えても擁護してもならない。さもなければ検邪聖省は訴えを起こす」とあるが、前記の様にこれが記されている議事録は、署名が無く法的には効力が無いと思われる。その上、ベラルミーノ枢機卿の手紙の内容と矛盾している（検邪聖省はベラルミーノ枢機卿の手紙の無視し、同枢機卿はすでに故人）。そもそも、一六一六年の戒告は裁判でもなく、ガリレオ自身なら宣誓証言していないので、法的に戒告違反ということにはならないと思われる。しか

し、実際には、ガリレオは戒告違反という「事実」を持って、有罪と判断され、『天文対話』は禁書となった。なお、この裁判において、一〇人の枢機卿のうち、三人が判決書に署名しなかった。この人数は普通であるということであるが、ウルバヌス八世の甥で、ガリレオと親しいフランチェスコ・バルベリーニ枢機卿などが欠席者の中にいることもあり、枢機卿内及び検邪聖省審問官内に意見の分裂があったことを示しているという解釈をするものもある。ただし、ガリレオに好意的であった、ガイド・ベンティボリーニ枢機卿は署名している。

いずれにせよ、ガリレオは「異端」放棄の宣誓をなし、これに署名している。ガリレオは検邪聖省内の牢に幽閉されたがすぐにトスカナ大使公邸へ移された。これには、フランチェスコ・バルベリーニ枢機卿の尽力によると思われる。

しかしながら、教皇即位の時点では、ガリレオに好意的であった教皇ウルバヌス八世に、その後何があったのであろうか。何故一六一六年の時点では、異端の文字を削った教皇（当時はバルベリーニ枢機卿）が、一六三三年の裁判では、「異端」放棄を命ずるようになったのであろうか。その理由として、次のような点が推測される。

（その一）『天文対話』が理不尽なまでにコペルニクス礼賛であるとの意見がガリレオの敵によってなされ、またシンプリーチヨに教皇の哲学を信奉させることによって、教皇に間抜けな役を演じさせたと言う煽動的な指摘に刺激され、「対話」の本文を調査させ、その結果激怒した。

（その二）三〇年戦争における、プロテスタントとの戦いでスペインを支援しなかったと言う苦情があり、教皇が教会を守らないのだと非難された。カトリック信仰の保護者としてのウルバヌス八世の役割に疑問の声が高まったこのとき、ガリレオへの寛大さを公然と示すという危険を侵すことは出来なかった。

(四) ローマからシエナ、そしてフィレンツェへ

一六三三年七月、ガリレオ、ローマを離れることが許され、彼の理解者であり、『天文対話』をも認めていたシエナの大神父 アスカニオ・ピッコローニの庇護下に入った。シエナにおいて、彼は科学的著述『新科学対話』の執筆を開始した。幽閉の状況は死ぬまで変わらなかったが、一六三三年一月ガリレオ、フィレンツェへ帰還した。一六三四年四月二日夜、ガリレオを常に慰めた長女である修道女マリア・チエレステが死去した。なお、一六三六年『クリスチーナ大公妃への手紙』を、一六三八年に『新科学対話』をオランダで出版している。ガリレオは、一六四二年一月八日死去した。七八歳であった。大公ヘルディナンド二世は、ガリレオの記念碑を作ろうとしたが教皇の反対に遭った。ガリレオの最終的な霊廟が、フィレンツェの元老委員ジョバンニ・パチイスタ・クレメンテ・デ・ネリによりサンタ・クローチエ教会に建造されたのは、一七三七年のことであった。

第二章 ガリレオ裁判の背景

(一) 歴史的背景

ガリレオ裁判と、それが起った時代的背景とは密接に関係している。それゆえ、ガリレイに関係した出来事を述べ、ガリレオ裁判の歴史的背景を素描することしよう。前述のように、ガリレオの活躍した、一六世紀後半から一七世紀前半の時代は、イタリアルネッサンスの末期、あるいは近代の始まる直前ともいうべき時代であり、ヨーロッパは激動の時代であった。

まず、一五一七年、ヨーロッパ宗教界の大事件、宗教改革がマルティン・ルターによって開始された。これ以降、ヨーロッパは、カトリックとプロテスタントとの神学的また軍事的抗争の危険にさらされることになる。当然、この宗教改革に対し、カトリック教会内部からの教会改革の運動（対抗宗教改革）も起り、一五二四年、イエズス会がイグナティウス・ロヨラらによって創設された。また、教皇庁内の制度としては、プロテスタント的なものを取り締まるため、一五四二年検邪聖省（長官、教皇）が、教皇パウルス三世により設けられた。この検邪聖省は、前身となる二つの宗教裁判所を近代化したものである。一つは、アルビ派のような異端と戦うために一二世紀に作られた中世の異端審問所であり、もう一つはスペインの異端審問所である。後者は、独立した活動を認められて、一九世紀まで存続した。ついで、一五七二年ピウス五世は、書物を検閲するために、禁書目録聖省を設置した。これら二つ組織は、一六、一七世紀のヨーロッパにおいて、カトリック教会を、他の諸制度と違つた特異なものとしている。なぜなら、これらの組織によって、カトリック教会は歓迎できない思想を批判するに止まらず、そのような思想を検閲し、抑圧し、その首謀者を処罰することができる唯一の制度となつたのである。

さらに重要なのは、前記のイエズス会が中心となつたトリエント宗教会議が、一五四五から一五六三年にかけて三期五回にわたり断続的に開かれたことである。この会議により、カトリック神学の引き締めと建て直しが図られた。特に、一五四六年、第四回の会合で、次のような宣言が採択された。

「さらに拘束を解かれた魂を抑制するために、公会議は、キリスト教の教義の啓発に付随する信仰と倫理に関して、何人も自分自身の判断に頼つて、聖書を自分の考えに従うように歪めることや、聖書が真に意味と解釈の判断をゆだねている神聖な母なる教会がこれまで保持し、今も保持している意味に反する解釈や、神父た

ちの一致した考えにさえ反する解釈を敢えてすることは、たとえそのような解釈がいかなる時にも決して公表されたことがないとしても、許されないと宣言することを宣言する。これに反して行動するものは、司教によって告発され、法に定められた罰則にのっとって罰せられるものとする」。

これにより、カトリック教会は、神学的に保守色を強めることになる。ガリレオが、『クリスティーナ大公妃への手紙』の中で、聖書解釈の問題に踏み込んだことに対する神学者の非難の根拠の一つは、この宣言にガリレオが抵触したためである。更に言えば、もともとキリスト教神学を頂点とする中世以来の学問の階層の中で、下位に属する数学者が神学の問題に口を挟むことは禁ぜられていたのである。

なお、コペルニクス（一四七三—一五四三）が活躍したのはこの少し前であり、トリエント宗教会議の直前の一五四三年その死の間際、コペルニクスの体系は数学的なモデルであると言う内容のオジアンダーの序文をつけ、主著『天球の回転について』が出版されている。

なお、ガリレオの生涯の間に起った宗教的大きな事件は、ドイツのプロテスタント諸侯とカトリック諸侯の衝突として一六一八年に始まり、一六三八年まで続いた三〇年戦争である。この戦争は、イタリア、フランス、ポルトガル、スウェーデン、デンマーク、ポーランド、トランシルヴァニア、トルコなどの諸国を巻き込み、押さえが利かないほど拡大していった。そして、一六三〇年には、衝突に火をつけた問題のうち、真に宗教的問題に関するものはほとんどなくなっていた。特に、フランスとスペインの両カトリック君主が、神聖ローマ帝国の支配を巡って争ったが、この間にあって、当時の教皇ウルバヌス八世（ガリレイ事件の当事者の一人）はスペインとの関係を悪化させるといふ失敗を演じてしまった。その心労のため、教皇庁の小鳥の声がうるさいと、小鳥の殺害を命じた

ほど精神的余裕がなくなっており、これがガリレオ裁判へ何らかの影響を与えたかもしれない。このスペインとの関係悪化の余波を受けて、ガリレオに好意的であった、通信秘書三一歳のジョバンニ・チアンポリは左遷されてしまった。なお、ウルバヌス八世は、三〇年戦争が終結する少し前、一六四四年に死去している。

(二) ガリレオ裁判の神学的背景

トレント宗教会議の宣言にある、神父の一致した聖書解釈の方法とは何であろうか。それは、キリスト教信仰と哲学の調和を旨指した、アウグスティヌスやトマス・アクイナス以来の伝統のことを意味しよう。ここでは、聖書のある箇所について、複数の解釈が可能である場合、そのどちらにも偏らないことが、推奨された。なぜなら、もしそのことが後に誤りであることがわかった場合、聖書の權威が揺らぐことが無いためである。又、もちろん字義どわりの解釈が望ましいのは言うまでも無いが、もし聖書の記述が、明らかに証明された真実と矛盾した場合には、聖書の「比喩的解釈」などを含め聖書の再解釈の方法をとらねばならない、とされた。これは、ベラルミーノ枢機卿からフォスカリーニ神父（太陽中心説を是認していることを公にした）への手紙の中にある、次の言葉の背後にあるものである。

「仮に太陽が宇宙の中心に在り、地球が第三の天球にあつて、太陽が地球の周りを回るのではなく、地球が太陽の周りを回ると言う真実の証拠が存在するとすれば、そのとき我々は、この証拠と反対のことを教えていると見受けられる聖書の文章を説明する際、周到な注意で進まねばなりません。そして、われわれは、真実だと実証される意見を虚偽だと決め付けるよりも、むしろ我々が、聖書の文章を、よく理解できなかったと認めるほうがよろしかろう」。

それでは、当時、太陽中心の体系について、この最高の知識人はどのように考えていたのだろうか。これもこの手紙の続きに示されている。

「ただ余自身について申し上げると、そのような証拠が余に示されるまでは、その種の証拠が存在するなどということは信ずることはいたしませんまい。

それに太陽が宇宙の中心にあり、地球が第三の天球にあると仮定しても、万事がその逆の場合と同じように動くなどということは、証拠でもなんでもない。このような疑問の余地がある場合には、我々は、聖なる（初期の教会教父たち）の示した聖書の解釈を棄ててしまつてはならない」。

以上のベラルミーノ枢機卿の意見を考慮した場合、ガリレオが自説を主張するためにはしなければならぬことは、太陽中心体系の実在を実証することであつた。しかし、この実証は結果的に失敗であるばかりでなく、当時としても彼の理論にあわない現象が既に指摘されていた。それは、ガリレオの理論によると、一日一回ずつの干潮と満潮があることになるのに対し、実際には、一日二回ずつの干潮と満潮が観測されるということであつた。しかし、これに対しガリレオは、この差異は海底の様々な形と様々な深さによつて説明できると結論した。だけであり、なんら実証的なものを提出したわけではない。したがつて、ガリレオが如何に思うと、当時としては、太陽中心説は仮説に留まらざるを得なかつたのである。さらに、ガリレオの太陽中心体系では、惑星の軌道を完全円運動としていたため、プトレマイオスの体系と比して、実用的複雑さはそれほど緩和されなかつたことも付け加えなければならなかつた。

しかし、一方カトリック教会が保持する、地球中心説の方はどうであろうか。それは実証された真理であろうか。もしそうでないなら、神学者は地球中心か太陽中心か、いずれの体系にも偏らない態度を示すべきではなかつたの

ではないだろうか。アリストテレスの主要部分が西欧に紹介されたのは、主として一二世紀であり、これについては賛成・反対様々な意見が存在した。特に、一二七七年のバリ司教、エティエンヌ・タンピエのアリストテレス哲学に対する異端断罪は、そのピークをなすものであった。もちろん、これ以降も中世全般を通じて、アリストテレス哲学に対するキリスト教側からの批判は存在した。それは前述の枢機卿カルロ・コンティの意見の中にも現れているとみなせよう。しかし、結局のところアリストテレスの哲学は生き残った。このアリストテレス哲学を基礎としたスコラ哲学の構築は、イタリアの多作な神学者トマス・アクイナスの努力によりなされた。説得力に満ちた彼のスコラ哲学は、彼の死後のことであるがカトリックの正統神学となり、教会とまだ初期の段階にあったヨーロッパの大学で、数百年に渡って大反響を呼び起こし、ガリレオが天空の構造についての著作を開始する遙か以前に、アリストテレスの言葉に聖典のような權威を与えていた。トリエントの宗教会議の結果はこの保守的なトマス神学への回帰といつてもよからう。地球中心の体系は、中世のカトリック神学において、トマス以来神父たちの一致した考えだったのである。

(三) 民衆の信仰

しかしながら、ガリレオの時代、何故かたくなにカトリック教会は太陽中心の体系を認めなかったのであろうか。コレージョ・ロマーノの優秀な学者集団を有するイエズス会にとつて、太陽中心の体系は、当時すでにその蓋然性を増しつつあったのではなからうか。にもかかわらず、太陽中心体系を認めなかったという事は、はたして、単に神父の一致した意見に反したためであるとか、あるいは「状況証拠の積み上げは、真理に近いことを示している」ということへの無理解がなせる業であったとするだけで、片付けられる問題であらうか。

これについて考えるためには、トマスがどのような考えで、アリストテレスの宇宙体系を、自己の神学の中に取り入れたのか考えてみなければならぬ。

トマスは、アリストテレスの宇宙論を多少変更して受け入れるとともに、「天とは完成された靈的被造物である」という、アウグスティヌスの考えを受け入れた。このことに關しては、つぎのような中村 治の意見がある。

「アリストテレスにおいては、恒星天球が宇宙の果てをなしていたが、トマスは恒星天球のさらに外側に、星はないが規則正しく日周運動のみを行う第一可動天を措定する。そして第一可動天のさらに外側に、星もなく運動もしない光輝天を措定する。そして、『天使たちはこの天球において創造され住んでいる』という。さて、天使を含めた上述の全体がトマスの宇宙である。神はこのような宇宙を創造した」。

さらに、彼はこの光輝天については、トマスの『神学大全』に基づいて、「トマスは、光輝天球を復活後の状態の先取りとして措定するのである」とし、また「復活後の被造物全体がそうなるであろう状態の先取りとして光輝天球を措定する、という当時流布されていた思想を取り入れるのである」と言う。トマスは天使や復活後の人間（救われた人間）が住む、所謂天国も含めた宇宙を被造物として措呈するのである。しかし、この宇宙論をもって彼何を表そうとしたのであろうか。中村 治は、これについて次のように言う。

「トマスがアリストテレスの宇宙論に変更を加えて自らの宇宙論を構築したのは、実在を表しかつ現象を救える理論を求めたからではないのではないか。トマスは、実はキリスト教神学に適合するような宇宙論、つまり神によって創造され、支配され、配慮されている宇宙についての理論、を構築したのであり、それを表現するために、アリストテレスの思想や当時流布されていた思想を用いたにすぎない、と思われるのである」（太字および傍点は筆者による）。

とすればトマスの宇宙の体系を、そのままの姿で存在するものとして受け取ることは必ずしもトマスの意図したところではないと思わなければならない。このことは、R・マンセツリの言う

「中世において知的な宗教……は、キリスト教の啓示の（ことば）によつて与えられる諸事実を観念的に組織化体系化しようという傾向があります。……知的な宗教は、可能な限り厳密で論理的に……民衆の信仰をも考慮にいれて、自らの含みこむ要素を適合させる過程を採りつつ、常に秩序づけられ一貫性のあるものとしようと努めるある複雑なもの、として特徴づけられます」（太字は筆者による）。

という考えと一致するものである。前記のトマスの宇宙論において考慮された「民衆の信仰」とは、「光輝天についての当時流布された思想」であり、また「地獄の位置」であつたと考えられよう。しかし、それは彼の神学を一貫性のあるものにするための、観念的なものだつたと考えられるのではないだろうか。一方、民衆はどうだつたのであろうか。同じくマンセツリは、

「民衆のもの（宗教）は、おなじ啓示の（ことば）を観念的な現実の複合したものとしてではなく、至高の權威によつて保障されたものと受け入れます」（一）（内は筆者による）」、
と云う。そして宇宙論に関係していうならば、

「……彼ら（中世の民衆）はその上に神的にして天上的な現実^{リアリティ}、その下に地獄の悪魔的な現実^{リアリティ}を持つ世界に住んでいます。ここで、その上とかその下とかと言う言葉は、たとえ知的な宗教が神の遍在を説き、悪魔の存在を心靈的なものと解するにしても、民衆の神性において明らかに存在するものと感受される場所的^{トポス}な価値を付与されて用いられているものです」（二）（内は筆者による）」。

と言ひ、彼らは、現実の宇宙の中に天国や地獄の場所を定めずにはおかないことを指摘する。トマスの意図がどう

であれ、トマスの天国や地獄は、民衆にとつてはまさに上方および下方に、それぞれ具体的・現実的に存在する場なのである。このような民衆の現実感を最もよく表しているのが、ダンテ・アレギエリ（一二六五—一三二一）の『神曲』である。マンセツリは天国と地獄について次のように述べる。

「天国に配置されるのが地獄です。これもまた、苦心の末に、悪魔たちが集まり、命令を発する中枢たる王サタンの地獄の使者たちが出陣する宮城として観念されるにいたりました。当然ながら、天国の悦楽には地獄の責め苦が対置されるのですが、ここでもまた、知的な宗教と民衆の信仰の差異を認めることが出来ます。前者にとつて天上の至高の愉悦は神の観想であり、地獄の最大の苦悩は神の喪失である一方、民衆の信仰にとつて天国を特徴付けるのは天上の歓喜であり、地獄は悪魔的な邪悪さによつて有罪者たちに対する残忍で純粋な苦痛が案出される場所なのです」。

そして、このような『神曲』の性格を、彼は次のように締めくくっている。

「この世を超えた世界のビジョンという観念領野に、具体的に正確な意味を持つて現れるものの内で最も際立っているのがダンテ・アレギエリの著書です。それは寓意を解した知的著述と、信徒たちの教化と聖化のために俗語で記された彼岸の旅物語といふどこか民衆的なところの混じた両義的姿を見せています」（太字は筆者による）。

このように、民衆の信仰と結びついたトマスの宇宙体系は、彼の意図がどうであれ、民衆に対し目に見える形で具体的に救いと裁きの体系を指し示すことにより、民衆教化のための有力な手段となつたと考えられる。

言い換えると、全ての主題の内でもっとも重大なもの、すなわち人間の罪と救済の主題が、壮大な宇宙のプランに合うように調整されている、ということになる。そして、ひとたびこの調整が為されてしまうと、宇宙のプラ

ンにおけるどんな変更も、キリストの生および死のドラマあるいは人間の救済のドラマに必然的に何らかの影響を与えるだろうと思われる。地球を動かすことは創造物の連鎖を破壊し、必然的に神の救済の働きに影響することになったのである。この体系が完成した時、ユダヤ教と同じく元々固有の宇宙論を持たなかったキリスト教神学が、中心で静止している地球という「古代ギリシャの宇宙論」の重要な防波堤となつてしまつたのである。

第四章 結びに代えて

(一)

太陽中心の体系およびガリレオについて、カトリック教会はその後どのように対応したのであつたであろうか。まず、一六六四年、「地球の運動と太陽の不動を教える本」を禁書とする命令文書は、暗黙裡に禁書目録からはずされてゐる。これが明確な形で完全に除外されたのは一七五七年のことであつた。また、一七四一年に、正式な告示で、条件付ではあるが、ガリレオの全著作を出版する許可が出されてゐる。一九八三年、教皇レオ三世は回勅『プロピデンティッシムス・デウス』で、聖アウグスティヌスを引用し、聖書が科学を教えることを目的としたものではないことを明らかにした。これは、先に示した、『クリステイーナ大公妃の手紙』でとつたガリレオの態度と同じものである。一九六六年、第二ヴァチカン公会議の結果、禁書目録そのものが廃止された。一九七九年、教皇ヨハネ・パウロ二世は、神学者や博学の士、歴史学者にガリレオ事件を再調査するように呼びかけた。更に、同教皇は一九八二年ガリレオ裁判を再び詳細に調べるため四つの研究グループよりなるガリレオ委員会を設立し、一九八九年は正式にガリレオの名譽を回復した。最終的に、一九九二年、教皇ヨハネ・パウロ二世は、ガリレオの哲学を公

式に是認し、ガリレオの死後、三五〇年を経過し、ガリレオ裁判は終了した。

(二)

ガリレオ裁判とは何であつたのであろうか。カトリック教会は決して頑迷固陋であつたわけではない。それどころか、コレージュ・ロマーノという優秀な研究機関を持ち、当時の大学の学者などよりは遙かに新しいものへの理解が進んでいたと思われる。それは、たとえ裁判によつて有罪が確定したにせよ、ガリレオへの支持者がカトリック教会内部に少なからずいたことから伺える。実は、森毅がそのエッセイでも言っているように、当の教皇も内心では地動説論者であつたかもしれないのである。したがつて、ガリレオの庇護者（ゴジモ二世、チエシ公爵、あるいはベラルミーノ枢機卿）がもう少し生きてゐるか、あるいは彼がもう少し違う振舞い方をしたならば、異端放棄を命ぜられるような裁判を回避できたかもしれないのである（この後者のような意見は、W・シーアの『ローマのガリレオ』にある）。

しかし、実際問題として、太陽中心の体系は、その實在の蓋然性は増しつつも、なお真理と主張するには未だ無理な時代であつた。加えて、中世の盛期（一二〜一三世紀）には、キリスト教は新しい哲学を取り入れようとより生き生きしているが、ガリレオの生きた一五〜一六世紀は、宗教改革への危機感から、カトリック教会は保守的傾向を強めていた時代であつた。その様な時、『神曲』に見られるような民衆の素朴な信仰を揺るがしかねない、世界体系論争（現実世界とはなんら関係なく、しばしば宮廷のサロンの話題程度なもの）は、害こそあれ益の無いものとカトリック指導者には思われたに違ひないのである。彼らの多くは、真剣に何百万という人々の魂の救いと平安をゆだねられておられると思つていたと思われる。我々は、ガリレオの生きた時代が、なお熱心な信仰の時代であつたこ

とを忘れてはならない。しかし、その上で、キリスト教の信仰と特定の宇宙体系の結びつきは、あのアウグスティヌスの忠告「聖書のある箇所について、複数の解釈が可能である場合、そのどちらにも偏らないことが、推奨された。なぜなら、もしそのことが後に誤りであることがわかった場合、聖書の権威が揺らぐことが無いためである」、に違反してしまったといえないであろうか。神学が、それ以外のものに依存してしまった失敗の、壮大な例がここにあるように思うのである。

参考文献

- ・ ジョルジュ・ド・サンティヤーナ（武谷三男監修、一瀬幸雄訳）『ガリレオ裁判』岩波書店（昭和四八年）
- ・ アレクサンドル・コイレ（菅谷暁訳）『ガリレオ研究』法政大学出版社（二九八九）
- ・ スティルマン・ドレイク（赤城昭夫訳）『ガリレオの思考をたどる』産業図書（平成五年）
- ・ 青木靖三『ガリレオ・ガリレイ』岩波書店（一九八六）
- ・ 田中一郎『ガリレオ』中央公論社（一九九五）
- ・ 渡辺正夫編著『ガリレオの斜塔』共立出版（一九八八）
- ・ 豊田利幸編集『ガリレオ』中央公論社（一九九三）
- ・ 伊東俊太郎編著『ガリレオ』講談社（一九八五）
- ・ デーヴァル・ソベル（田中勝彦訳）『ガリレオの娘』DNC（二〇〇二）
- ・ W・シリア、M・アルディガス（浜林正夫、柴田知薫子訳）『ローマのガリレオ』大月書店（二〇〇五）
- ・ ガリレオ・ガリレイ（山田慶児、谷 泰訳）『星界の報告』岩波書店（一九八八）
- ・ ガリレオ・ガリレイ（青木靖三訳）『天文対話』上、下、岩波書店（一九九三）

- ・ガリレオ・ガリレイ（今野武雄、日田節次訳）『新科学対話』上、下、岩波書店（一九九五）
- ・R・マンセツリ（大橋喜之訳）『西欧中世の民衆信仰―神秘の感受と異端』、八坂書店（二〇〇二）
- ・中村 治「トマス・アキナスの宇宙論の性格」、上智大学中世思想研究所編『中世の自然観』創文社（一九九二）所収
- ・森 毅『魔術から数学へ』講談社（一九九三）